

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）  
平成 23 年度発生予報第 5 号を下記のとおり発表しましたので送付します。

平成 23 年度病虫害発生予報第 5 号（8 月予報）

I 向こう 1 ヶ月の気象予報：平成 23 年 7 月 29 日福岡管区気象台発表（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	30	40	30
	降水量	30	40	30
	日照時間	30	40	30

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早植水稻	穂いもち	やや多	多	やや多(+)	やや多～少 (±)	気温並(±) 降水並(±)	
	斑点米カメムシ類	やや少	並	やや少(-)	並(±)	気温並(±) 降水並(±)	
普通期 水稻	コブノメイガ	少	少	少(-)	並～少 (-)	気温並(±) 降水並(±)	一斉調査 (-)
早植・普 通期水稻	トビイロウンカ	少	少	並～やや少 (-)	並～少 (-)	気温並(±)	予察灯の 誘殺無し (-)
茶	炭疽病	やや多	やや多	やや多(+)	やや多～ 並(+)	気温並(±) 降水並(±)	
	チャノキイロア ザミウマ	並	並	並(±)	並(±)	気温並(±) 降水並(±)	生産研粘着 トラップ 並 (±) 茶研ほ場調 査 少(-)
	カンザワハダニ	やや多	やや多	やや多(+)	やや少～ 少(-)	気温並(±) 降水並(±)	茶研ほ場 調査 並 (±)

カンキツ	黒点病	並	並	並(±)	やや多～ 並(+)	気温並(±) 降水並(±)	果樹研ほ 場調査多 (+)
	ミカンハダニ	やや少	やや少	やや少(－)	やや多～ 並(+)	気温並(±) 降水並(±)	果樹研ほ 場調査や や少(－)
	チャノキイロアザ ミウマ	やや多	やや多	並(±)	やや多～ やや少(±)	気温並(±) 降水並(±)	河内町定 点 多(+)
果樹全般	果樹 カメムシ類	並	並	－	(カンキツ) 平年並 ～やや少(－) (ナシ) やや多 ～やや少(±) (カキ) 少(－)	気温並(±) 降水並(±)	各予察灯・ フェロモントラップ 調査 天農研(－) 生産研(－) 果樹研(+)
夏秋 トマト (高冷地)	すすかび病	－	やや多	やや多(+)	やや多～並 (+)	日照並(±)	巡回調査 前年比
イチゴ 育苗床	炭疽病	やや多	やや多	やや多(+)	並(±)	気温並(±) 降水並(±)	
	うどんこ病	並	並	やや少(－)	並～少(±)	気温並(±) 日照並(±)	
夏秋 果菜類	コナジラミ類 タバココナジラミ	やや多	並	ナスやや多 (+)	ナスやや多(+) キュウリ並(±)	気温並(±)	
	オンシツコナジラミ	並	並	トマト やや少(－)	トマト 並～少(±)		
	アザミウマ類	やや多	やや多	ナス多(+)	ナスやや多(+)	気温並(±)	
					キュウリ並(±)		
イチゴ 育苗床	ハダニ類	やや多	やや多	やや多(+)	やや多～並 (+)	気温並(±) 日照並(±)	
野菜 全般	ハスモンヨトウ	並	並	イチゴ、トマト ナス、キャベツ 並(±)	ナス少(－) トマト並(±) キャベツ並(±) イチゴ並～やや少 (±)～(－)	気温並(±)	誘殺数 多～ やや少 (+～－)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(－)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

## 2 予想発生量、根拠、対策等

### ◎早植水稻

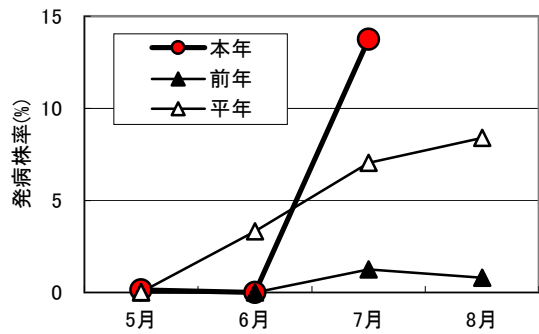
#### 1) 穂いもち

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、葉いもちの発病株率13.8%（平年7.0%）で平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 穂いもちは、発生後の防除が困難なので、予防防除を徹底する。

イ 粉剤、水和剤は、穂ばらみ期から穂揃い期に散布する。  
粒剤は、薬剤の種類によって使用時期が異なるので注意する。



早期早植水稻の葉いもちの発病株率の推移

#### 2) 斑点米カメムシ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めず平年比やや少の発生であった（平年0.05頭/25株）（-）。

(3) 対策 ア 水稻出穂後における周辺雑草の除草は、本田への飛来を助長するために行わない。

イ 周辺より出穂が早いほ場は、飛来が多くなりやすいので注意する。

### ◎普通期水稻

#### 1) コブノメイガ

(1) 発生量：少

(2) 根拠

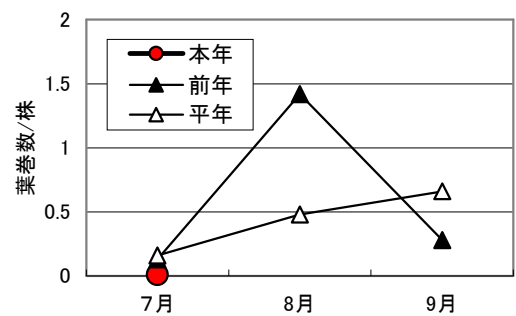
ア 7月13日に実施した普通期水稻48ほ場における特別調査では、発生を認めず平年比少の発生であった（平年の被害株率15.7%）（-）。

（平成23年7月19日付技術情報第7号参照）

イ 7月の巡回調査では、葉巻数0.01枚/株（平年の葉巻数0.16枚/株）で平年比少の発生であった（-）。

ウ フェロモントラップ調査では、生産環境研究所（合志市）で6月11日に初飛来を確認した後は誘殺を認めていない（-）。

エ 天草農業研究所（天草市）では、6月11日に初飛来を確認した。



普通期水稻におけるコブノメイガの被害推移

(3) 対策 ア 6月11日飛来波の第2世代発蛾最盛期は、8月15～18日頃と予想される。水田を観察し、要防除水準（第2世代幼虫による被害株率が20%以上）を超える場合、粒剤は発蛾最盛期、粉剤・液剤は発蛾最盛期1週間後に処理する。

## ◎早植・普通期水稻

### 1) トビイロウンカ

(1) 発生量：少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めず（平年の発生量：早期早植0.1頭/株、普通期0.0頭/株）、早期早植で平年比やや少、普通期で平年並の発生であった（－）。

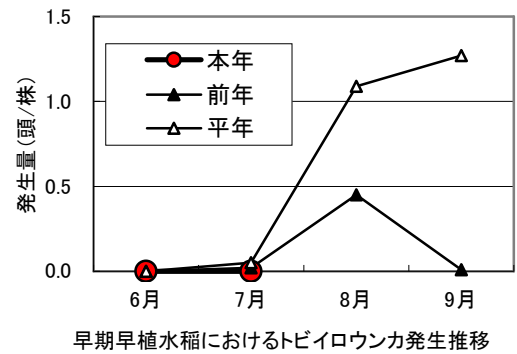
イ 予察灯での誘殺は、認められていない（平年の6月1半旬～7月3半旬の誘殺数：生産環境研究所（合志市）100頭、天草農業研究所（天草市）

23頭）（－）。

(3) 対策 ア 本年のトビイロウンカの防除適期（第2世代幼虫ふ化揃い期）は、8月下旬～9月上旬と予想される（平成23年7月19日付技術情報第7号参照）。

イ 防除適期前の8月上旬の発生状況を確認し、要防除密度（成幼虫20頭/100株）を超える場合は防除を行う。

ウ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。



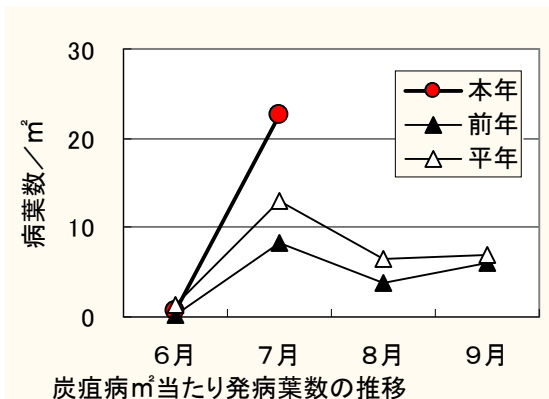
## ◎チャ

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率22.8%（平年13.6%）と平年比やや多の発生であった（＋）。

(3) 対策 ア 秋期の発生は翌春一番茶の収量や品質に及ぼす影響が大きいので、常発地では摘採残葉の発病状況に注意し、新芽生育期（1葉期）に予防防除を行う。



### 2) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では寄生葉率3.3%（平年2.6%）と平年並の発生であった（±）。

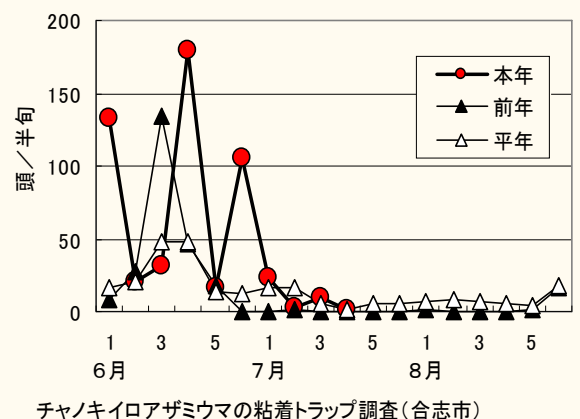
イ 茶業研究所（御船町）のたたき落とし調査では、7月第1～4半旬の捕獲頭数が15頭（平年202頭）と平年比少の発生であった（－）。

ウ 生産環境研究所（合志市）の粘着トラップ調査では、7月第1～4半旬の捕獲頭数が37頭（平年39頭）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 新芽が加害されるので、萌芽期に防除を行う。

イ 中切り等の更新園、摘採中止園などでは、茶芽生育期間が長く、長期に渡り被害を受けやすいので、残効の長い合成ピレスロイド剤、ネオニコチノイド剤などで防除する。

ウ アメダス地点の有効積算温度シミュレーションによる第5世代の羽化最



盛期は熊本（8月3日）、三角（8月9日）、本渡（8月10日）、八代（8月6日）、水俣（8月7日）と予想される。

### 3) カンザワハダニ

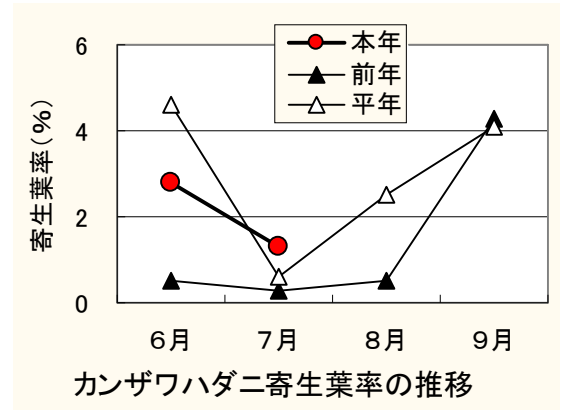
（1）発生量：やや多

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率1.3%（平年0.6%）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 茶業研究所（御船町）の調査では、7月第4半旬の寄生葉率が1.0%（平年0.8%）と平年並の発生であった（±）。

（3）対策 ア 一般に8月下旬頃から発生が多くなるため、茶園をよく観察し、要防除水準（寄生葉率5%以上）になったら防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。



### ◎カンキツ

#### 1) 黒点病

（1）発生量：並

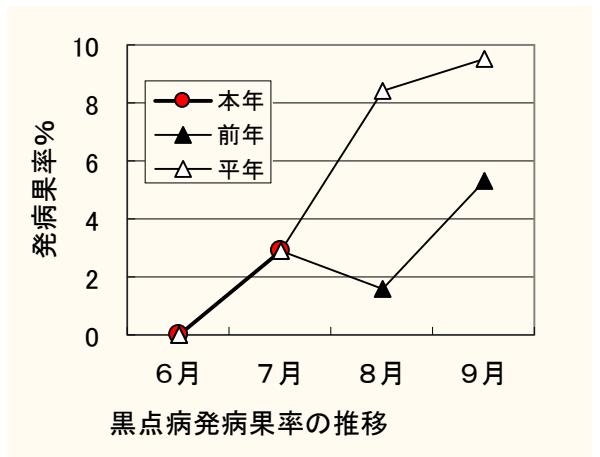
（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病果率2.9%（平年2.9%）と平年並の発生であった（±）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、7月4半旬の発病果率は10.0%で、平年（82.6%）より多かった（+）。

（3）対策 ア 保菌率が高い直径5～10mmの枯枝は、剪除する。

イ 剪定枝は、伝染源になるので園外に処分する。

ウ 前回の散布から累積降水量が200～250mmを越えた時期、または25～30日経過した時期を目安に防除する。



#### 2) ミカンハダニ

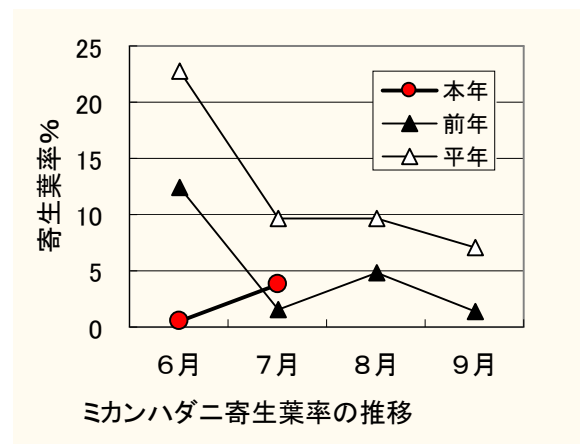
（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率3.9%（平年9.6%）、寄生頭数1.0頭/10葉（平年4.6頭/10葉）と平年比やや少の発生であった（-）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、雌成虫の寄生葉率0.0%（平年6.4%）、寄生頭数0.0頭/10葉（平年1.9頭/10葉）と平年比少発生であった（-）。

（3）対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%、または雌成虫の寄生頭数が10葉当たり5～10頭に達した場合は防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



### 3) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：やや多

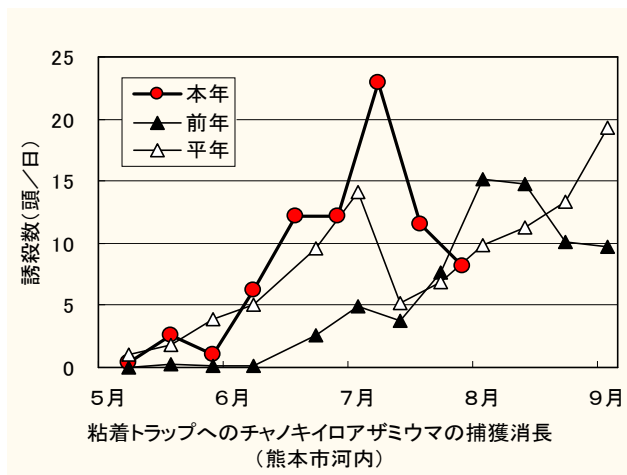
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害果率0.0%（平年1.7%）と平年並の発生であった（±）。

イ 熊本市河内町の粘着トラップ調査における第3世代成虫の捕獲数は23.0頭/日と過去2カ年（平均値14.1頭/日）より多かった（+）。

また、7月下旬における被害果率も8.2%と過去2カ年（平均値4.4%）に比べ高かった（+）。

(3) 対策 ア アメダス地点の有効積算温度シミュレーションによる第5世代の羽化最盛期は熊本（8月3日）、三角（8月9日）、本渡（8月10日）、八代（8月6日）、水俣（8月7日）と予想された。

イ 発生調査は、果実（100果）を5,000～10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が15頭を越えた場合、防除する。



### ◎果樹全般

#### 1) カメムシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア トラップ調査による各地のチャバネアオカメムシの7月第1～4半旬の誘殺数は、生産環境研究所（合志市）が平年より少なく（－）、果樹研究所（宇城市）が多く（＋）、天草農業研究所（天草市）は少なかった（－）。

イ 病害虫防除員の報告では、7月の発生は平年並～やや少であった（－）。

ウ ヒノキ球果の1果当たり口針鞘数は、県内4地点（熊本市河内、宇城市松橋、宇城市三角、合志市栄）の平均が0.6本（平年2.7本）うち最も値が高かったのは三角町の1.4本、次いで松橋町の0.6本であった（－）。

(3) 対策 ア 離脱（樹園地への飛来）の目安となる口針鞘数は、1球果当たり平均25本であるが、福岡県が作成した予測式で離脱予想日を算出すると、7月22日を起点に口針鞘数が1本未満の場合、判定結果は9月4日以降となる。

イ 果樹園への飛来初期は局在し、発見が遅れやすい。園内をよく見回り、早期発見に努め、発生初期の防除に努める。

#### 各地域におけるカメムシ類の誘殺状況(7月1半旬～4半旬) 単位:頭

地域名	チャバネアオカメムシ		ツヤアオカメムシ	
	予察灯	フェロモントラップ	予察灯	フェロモントラップ
合志	35(116)	8(264)	2(26)	0(0)
宇城	186(116)	764(289)	47(30)	0(30)
天草	283(2,658)	390(1,256)	48(579)	5(50)

( )は平年値

## ◎夏秋トマト

### 1) すすかび病

(1) 発生量：やや多（前年比）

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率26.0%で前年比やや多の発生であった（前年18.0%）（+）。

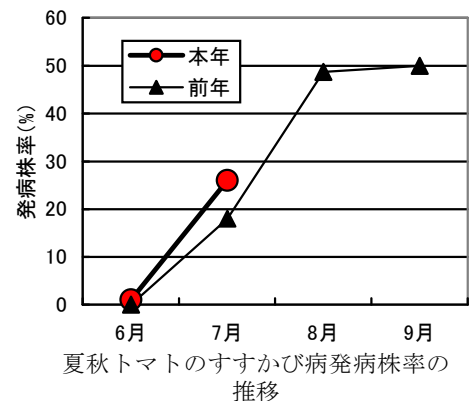
(3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

イ 換気を良くし、過湿防止に努める。

ウ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。



## ◎イチゴ育苗床

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：やや多（葉枯れ：やや多、萎凋性：並）

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、葉枯れ炭疽の発病株率1.6%で平年比やや多の発生であった（平年0.6%）（+）。

イ 7月の巡回調査では、萎凋性炭疽の発病は認められず、平年並の発生であった（平年0.0%）（±）。

(3) 対策 ア **降雨による病原菌の飛散を防止するため、育苗床にはビニールで雨よけする。また、全面マルチや高設育苗を行い、泥水の跳ね返りを防止する。**

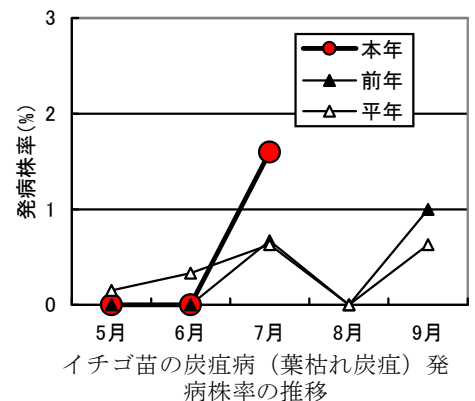
イ **頭上灌水は避け、株元に手灌水する。**

ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。

エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、埋没処分する。

オ 予防散布に努める。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。特に、降雨後、摘葉後およびランナー切除後は感染しやすいので防除を行う。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。



### 2) うどんこ病

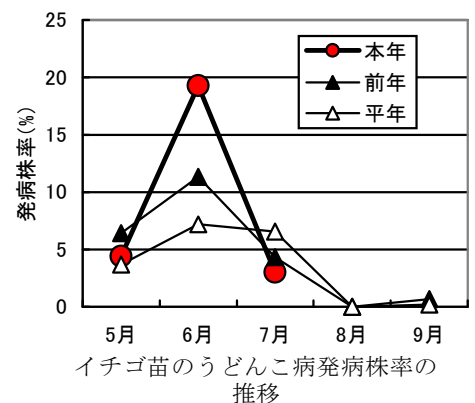
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率3.0%で平年比やや小の発生であった（平年6.6%）（-）。

(3) 対策 ア **盛夏期には新葉への病勢進展が抑制されるため、この時期に発病葉や不要な下葉などを取り除き、ほ場外で処分し、9月以降の伝染源を少なくする。**

イ 定期的に予防防除を行う。薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。





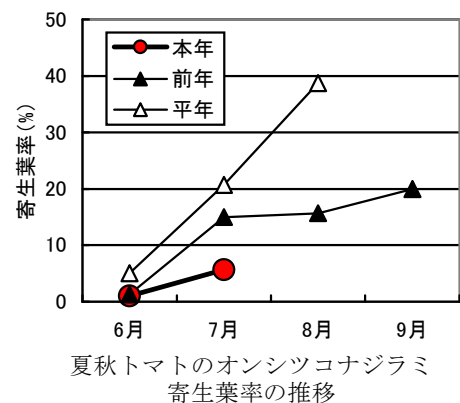
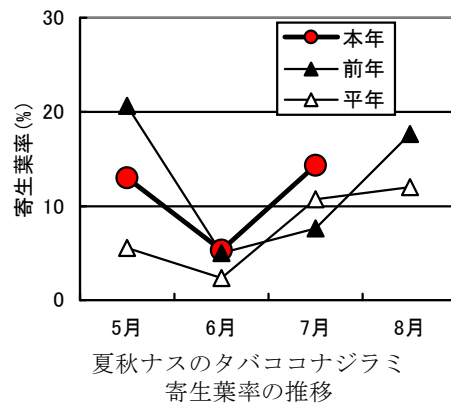
## ◎果菜類

### 1) コナジラミ類

(1) 発生量：タバココナジラミ・やや多、オンシツコナジラミ・並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、タバココナジラミはナスで寄生葉率14.3%で平年比やや多の発生であった(平年10.7%) (+)。

イ 7月の巡回調査では、オンシツコナジラミは、トマトで寄生葉率5.7%で平年比やや少の発生であった(平年20.7%) (-)。



(3) 対策 ア 気温が高くなると増加する。現在発生しているほ場では、早期に防除する。

イ **タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する。**

ウ ウイルス病発病株は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに抜き取り施設外に持ち出し埋没処分するか、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。

エ 施設内部の雑草は、生息・増殖場所となるので、定期的に除草する。

オ 黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### 2) アザミウマ類

(1) 発生量：やや多

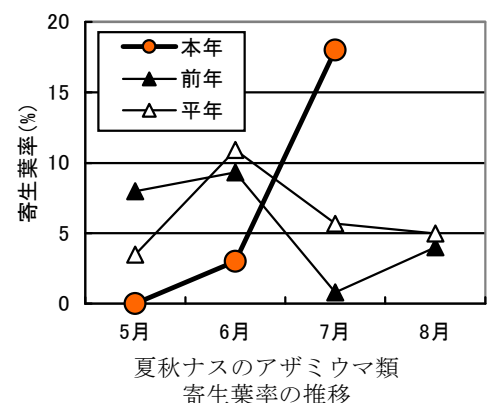
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、ナスで寄生葉率18.0% (平年5.7%) 平年比多の発生であった (+)。

(3) 対策 **ア 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、初期防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。**

**イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する。**

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。





## ◎イチゴ育苗床

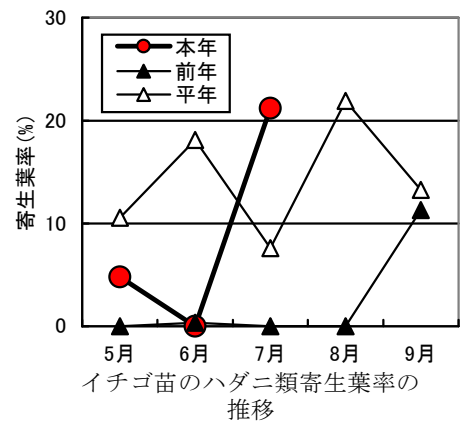
### 1) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率21.2%で平年比やや多の発生であった（平年7.6%）（+）。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に下位葉を重点に防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。



## ◎野菜全般

### 1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めず、平年並の発生であった（平年の寄生株率イチゴ0.0%、トマト0.0%、ナス0.0%、キャベツ0.0%）（±）。

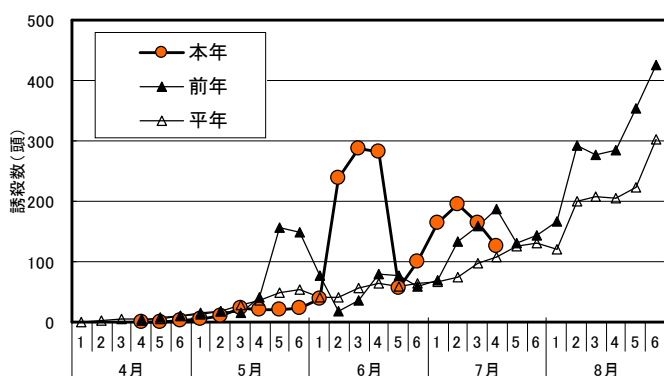
イ フェロモントラップによる7月第1～4半旬の誘殺数は、い業研究所（八代市）が650頭（平年346頭）が平年比多、生産環境研究所（合志市）が562頭（平年423頭）で平年比やや多、山都町鶴底が99頭（平年97頭）で平年並、高原農業研究所（阿蘇市）が381頭（平年555頭）、阿蘇市波野が77頭（平年83頭）で平年比やや少であった（+～-）。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

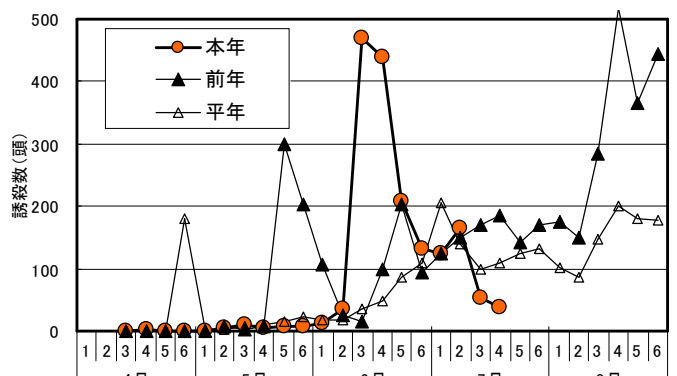
イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。



ハスモンヨトウ誘殺状況(フェロモントラップ) 八代市鏡町



ハスモンヨトウ誘殺状況(フェロモントラップ) 阿蘇市一の宮町

## 野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン 退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」等のウイルス病が発生しており、これらの病害は、タバココナジラミやミナミキイロアザミウマの微小害虫により媒介されます。防除対策が不十分な場合、ウイルスを持った微小害虫が野外へ一斉に飛び出し、ウイルス病が多発生するおそれがあります。

以下の対策を実行することで、ウイルス病の被害を少なくしましょう。

### 施設野菜全般

- ① コナジラミ類やアザミウマ類のハウス外への飛び出しを防ぐため、栽培終了までネットを被覆し防除を徹底する。
- ② 施設栽培終了後は、タバココナジラミはウイルスの媒介能力が失われる作物枯死后2週間以上、ミナミキイロアザミウマは保毒虫の羽化を早め成虫を餓死させるため栽培終了後2週間以上ハウスを密閉し、ハウス内の温度を上げる蒸し込み処理を行う。

### ウリ類（メロン・キュウリ・スイカ）

- ① ウイルス発病株は伝染源となるため、直ちに抜き取りハウス外に埋没するか、ビニール袋に入れて完全に枯れるまで密閉処理をする。
- ② ウイルスが感染する作物の連続栽培をさけ、感染作物のない期間を設けてウイルスの伝染（つながり）を断ち切る。
- ③ これから定植する場合は、ベストガード粒剤、または、スタークル／アルバリン粒剤を定植2～3日前に苗の株元に処理する。

## イチゴのうどんこ病、炭疽病、ハダニ類の防除対策（育苗期）

### 1. うどんこ病

盛夏期には潜在感染し、菌そうが見えなくなる。定期的に予防防除を実施し、菌密度を下げる。

#### <防除対策>

- ①発病葉は早めに取り除き処分する。
- ②薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。
- ③薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### 2. 炭疽病

降雨時や頭上灌水により保菌株からの炭疽病菌が飛散する。保菌株からの炭疽病菌の伝染およびまん延を防止するため、以下の防除対策を徹底する。

#### <防除対策>

- ①育苗床は必ず雨よけを行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
- ②育苗床は冠水しないように排水対策を講じる。
- ③頭上灌水は避け、株元に手灌水にする。
- ④定期的に予防防除を行う。特に、降雨後、摘葉後、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。
- ⑤発病株は早期には場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

### 3. ハダニ類

#### <防除対策>

- ①寄生密度が高くなると防除が困難なため、初期防除に努める。
- ②発生初期に下位葉を重点に防除する。
- ③薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## Ⅲ 【その他の病虫害】

作 物	病 害 虫 名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
早植水稻	紋枯病	並	巡回調査は、平年並（±）。 要防除水準は穂ばらみ期の発病株率 20 %である。 粉剤、水和剤は穂ばらみ期から出穂期に散布する。 粒剤は出穂 30 ～ 10 日前に処理するが、薬剤の種類によって使用時期が異なるので注意する。
普通期 水稻	葉いもち	やや少	巡回調査は、平年比やや少（－）。 上位葉への進展が見られる場合は、薬剤防除を行う。
普通期 水稻	紋枯病	並	巡回調査は、平年並（±）。 8 月の気温が平年より高く推移した場合は、多発する傾向があるため、発生状況に注意する。 要防除水準は穂ばらみ期の発病株率 20 %である。 粉剤、水和剤は穂ばらみ期から出穂期に散布する。 粒剤は出穂 30 ～ 10 日前に処理するが、薬剤の種類によって使用時期が異なるので注意する。

茶	チャノホソガ	やや少	巡回調査は、平年比少（－）。 防除員報告は、平年比やや少～少（－）。 フェロモントラップ調査では、平年比やや少（－）。 茶業研究所の調査では、平年並（±）。
	チャノコクモンハマキ	やや少	巡回調査は、平年比やや少（－）。 防除員報告は、平年並（±）。 フェロモントラップ調査では、平年比やや少（－）。 茶業研究所の調査では、平年並（±）。
	チャハマキ	やや少	巡回調査は、平年比やや少（－）。 防除員報告は、平年並（±）。 フェロモントラップ調査では、平年並（±）。 茶業研究所の調査では、平年比やや少（－）。
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	巡回調査は、平年並（±）。 防除員の報告は、平年比やや少～少（－）。 茶業研究所の調査では、平年並（±）。
カンキツ	かいよう病	やや少	巡回調査は、平年比やや少（－）。 果樹研究所の調査では、平年並（±）。 防除員報告は、平年比やや多～やや少（±）。 伝染源となる発病葉や枝・果実は除去する。 ミカンハモグリガの食害痕に発生しやすいため、防除及び被害葉の除去に努める。
	カイガラムシ類	並	防除員報告は、平年並～やや少（－）。 薬剤による防除は、効果の高い幼虫発生初期に行う。 アカマルカイガラムシ＝7月下旬～8月上旬 ナシマルカイガラムシ＝7月下旬～8月中旬
ナシ	うどんこ病	並	巡回調査は、平年並（±）。 防除員報告は、平年並（±）。 高温・乾燥が続くと多発する。 早期落葉により樹勢が低下するので、予防防除を徹底する。
	ハダニ類	やや多	巡回調査は、平年比やや多（＋）。 防除員報告では、平年並～やや少（－）。 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率20%以上、1葉当たり1～2頭に達したら防除する。
夏秋トマト （高冷地）	葉かび病	並	巡回調査は、平年比やや少（－）。 <b>抵抗性品種でも発病に注意する。</b> 肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。葉裏にも充分かかるよう薬剤散布を行う
夏秋ナス （平坦地）	すすかび病	並	巡回調査は平年比やや少の発生（－）。 薬剤は葉裏にも充分かかるよう散布する。
夏秋キュウリ （高冷地）	べと病	並	防除員報告は、平年比やや少（－）。 肥料切れに注意し、適正な肥培管理を行う。
	褐斑病	並	防除員報告は、平年比やや多～少（＋～－）。 伝染源となる発病葉や不要な下葉は、早めに取り除き施設外で処分する。

夏 秋 キヤベツ (高冷地)	細菌性病害(黒腐病・軟腐病・黒斑細菌病)	やや少	巡回調査は、発生無し(±) 防除員報告は、平年比やや多～並(+) ほ場の排水を良くし、被害残さ等はほ場外に処分する。
野菜全般	オオタバコガ	やや少	フェロモントラップの誘殺数は、合志市、八代市、阿蘇市、山都町でいずれも平年比やや少(－) 巡回調査では発生を認めず(－)、防除員報告は平年並～やや少(－) 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では、防虫ネットで侵入を防ぐ。
夏 秋 キヤベツ (高冷地)	コナガ	並	フェロモントラップの誘殺数は、阿蘇市波野、山都町で平年並(±) 防除員報告は平年比やや多～やや少(+～－)
<b>【野菜病害虫の共通対策事項】</b> ・換気や排水を良くし、加湿防止に努める。(病害) ・多発後は防除が困難になるので、早期に発見し初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。			

#### IV その他

#### 農薬安全使用上の留意点

**農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。**

**また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行なうなど、危害防止に努めましょう。**

◎ 詳しい内容等については 生産環境研究所病虫害研究室（病虫害防除所）  
（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。